史料翻刻

奥宮慥斎日記――明治時代の部（二）――

島　善高

解題

本号には、明治二年七月から明治三年七月までの日記及び関連史料を翻刻した。翻刻順に掲げると次の通りである。

①「雑記　明治二己巳歳秋七月七日始」（明治二年七月七日～七月二十七日）（受入番号六―一〇）

②「西巡紀程　天　稿本」（明治三年三月十日～三月晦日）（受入番号七―四七）

③「庚午夏四月　西巡紀程　第二集　晦堂老人蔵」（明治三年四月一日～五月十一日）（受入番号七―四五）

④「東京日記」（明治三年五月十五日～七月晦日）（受入番号七―四八）

⑤参考一、「方今王政維新云々」（明治三年二月二十五日）（受入番号六―六〇）

⑥参考二、「喩俗大意」（年月日未詳）（受入番号二―五二）

右の内、②の「西巡紀程」には三種類の草稿があり、最初に「明治庚午　西巡紀程　明治三年三月九日　奥宮」（明治三年三月十日～四月一日）（受入番号七―四五）が書かれ、次いでそれを修正したのが「西巡紀程　草藁」（明治三年三月十日～同晦日）（受入番号七―四六）であり、更にこれに手を入れたものが、今回翻刻した「西巡紀程　天　稿本」である。

明治元年、藩校の教授であった慥斎は、明治二年中も相変わらず藩校に勤務していたが、明治三年一月十日、土佐藩が新たに設置した喩俗司の都教に任じられて、三月十日から四月十七日まで土佐の西部地方を巡回した（杉山剛「高知における大教宣布―奥宮慥斎の活動を通して―」『社学研論集』第十四号掲載予定）。この喩俗司は、明治政府の

宣教活動の一環として明治二年十一月に設置されたものであって、慥斎もこの任務を余程重く受け止めていた。参考として翻刻した「方今王政維新云々」（明治三年二月）及び「喩俗大意」（年月日未詳）を一読すれば、慥斎の意気込みの程も窺われよう。「西巡紀程」に何度も手を加えたのは、その故である。

この後、慥斎は東京出張を命じられ、五月十五日に高知を出発、十五日東京に到着した。そして大学に通っている長男を始め、土佐出身の門生たち、同じ土佐出身の参議佐々木高行、斎藤利行らを訪ねているうち、六月二十七日、神祇官権大史に任じられた。

慥斎の日記には、上京の理由、神祇官就職の経緯について何の記載もないが、斎藤の五月二十五日附佐々木宛書翰に「福羽より只今帰候処にて御坐候、宣教主意書類、夫々書類取揃、明日福羽より下官宅迄相廻候に付、夫を奥宮（周次郎）熟読之上、福羽宅へ参り候はゞ、面会可致、尤日を限り、福羽より沙汰致候筈に付、右書類小弟より奥宮へ廻し、委細可申達と奉存候」（『保古飛呂比』第四、三四三頁）とあるので、宣教使関係の書類を見るために上京したことが知られる。さらに斎藤の六月十五日附佐々木宛書翰に「是非々々此者は帰藩被仰下、其上何卒神祇官御用之人物御撰なれば」云々（同書三五七頁）とあることによって、斎藤が就職の斡旋をしたことがわかる。

なお、④「東京日記」は明治三年十一月二十四日までの記事があるが、分量の都合で、今回は七月までを翻刻した。

また慥斎の日記は、その大部分が子息の手で「慥斎先生日記」として清書されている。②と④も「慥斎先生日記九」（受入番号五七）に清書されているけれども、清書の際に時折原文に手を加えている箇所があるので、翻刻に当たっては、参考程度に止めた。

「雑記」（明治二年七月）

（表紙）

「雑記　明治二己巳歳秋七月七日始」

（明治二年七月）

七月七日、新霽、朝微雨、漾島二生、祇役東京、余送別、微醺、付書信、終日無事、岡村生見訪、買麦五斗、價七百拾銭也、以一石換一貫四百二十銭也、是日有省於誠意功夫

オモヒツク事ヲ其侭直ニ行ヒ〳〵スルハ、物ヲ遂ガ如クナレトモ、コヽニ致良知工夫アレハ、スラリ〳〵トナシ行クモノナリ、致良知トハ、本心ノ光ヲ行届カスル事也、心ノ光ハ知ナリ、良ト云ハウブナリノ光ト云事ナリ、知ニモ二ツアリテ、知識ト云ハ、見タリ聞タリスル事ノ心ニシミ付テ、モノシリトナリタル知恵也、良知ト云ハ見聞ニヨラズ、天然ウブナリノ知恵也、コノウブナリノ知ト云モノ、聖凡ヲヘタテス、誰人ニテモうまれ付テアルモノ也、ソレヲ行届カスレハ、何事モサシツカヘナシ、其行届カスルニハ事物何ニヨラス、気ノ付シ事ヲソレ〳〵シテ行クカ一番ノ功夫也、是ヲ致知在格物ト云、コレヲ誠意ノ功夫ト云也

八日、晴、早起、出館、無事

九日、晴、炎威如火、出館、夜帰

十日、晴、朝出、夜帰、省母

十一日、晴、休業

十二日、晴

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

廿

廿六日、有省

（廿七日）

雖上知不能無人心、雖下愚不能無道心、一朝之怒忘其身、禍及親ト、如何ニ心持アリトモ、忽怒気発レハ、目モ見ヘヌ程ニナル事、有仁体モ構ハヌニ至ル、可愧可警

我如斯修行ス、最早此位ノ事ハアルマシト思フ事、時ニアリ、践履日浅、実功固リ薄キニヨルト雖モ、従来如是モノ也、些子モ油断ナ

ラス、極々危ナキハ人心ノ常ナリ、更ニ〳〵手離シ自然ナト云ハ、合点ユカス、廿七日朝録

戒ト云事、古聖賢毎々懇々説ケリ、戒惧ハ本体上ノ功夫ナリ、欲誘ヒ知導ク人心ナレハ、此ニ少ニテモ油断アレハ、忽堕落スル也、夫子ノ三戒ナト可省、同日

「西巡紀程稿」（明治三年三月～同晦日）

（表紙）

「西巡紀程　天　　稿本」

西巡紀程稿　　慥斎老人　著

明治三年庚午春正月、余新承乏諭俗司都教。蓋王政維新欲普施文明開化之治設宣教使吾藩亦新置此司（頭注「蓋以下数句刪去与下重複」）、将以布教民間。以三月初九日。先巡西郡。発布山、季児門生等送至橋下（付箋「先巡西郡以三月初九日発布山ニ作ル如何」）。従石淵命籥。路揚風埃。抵長縄堤。舍籥而歩。踰荒倉。渡贄水。宿高陵。此行随余者。助教島本百郎。乙政甚五。及何女。仕丁某。僕兼二。併（以下削如何）余五人。独中岡喜源太。以痾留府（付箋「独中岡以下属刪如何」）。

（明治三年三月）

十日。晴晏発高陵。渓。入戸波渓。里正丘林生。予旧門人也。迎請小憩。傾一杯去。踰名越。柏杉多伐。云賣山開墾。坂尽處曰吾井郷。宿須崎。途中所得國雅多遺忘。僅録所記。

我ために誘ひ残せる山さくら　春のあらしハ心有けり

草枕花ニ霞に分迷ふ　たひをうきものと誰かいゝけむ

よしさらハ春の一重ハ過ぬとも　また八重櫻たのもしけなり

藤浪に紫つゝし色そへて　春深けにも見ゆる谷川

むかし誰からきうき世に関すへて　塩九升坂と名にや立けむ

塩九升（シヤクチヤウ）坂在須崎東、里俗云、昔人設関税塩、及一斗過者、皆曰塩九升、故名、

十一日。陰滞須崎。始会近傍里正等凡六十五名、十二村。予先演諭旨。助教百郎述其詳。大意云。

朝廷新置宣教使。将宣教於四方。吾藩亦躰此意。欲教喩民間。雖規則未定。先巡圜郡。普布告大旨。汝里正村長。其宜体此意。協心戮力。以補教化焉。（喩告別具）晩訪宮尾啓齊。観須崎治所。今廃矣。助教山本安太郎為治所官属。為前職所羈滞此。云明日必追随。故人田所荘次来訪（頭注「故人二字刪晩字ヲ加如何」）。命飲話旧。至夜分燭見跋遂留宿。荘次啓齋恵酒肴。夜雨甚。

十二日。新霽枕上与荘二話。午後又挙別杯。命舟出馬頭。島嶼嶠礁頗可観瞥認南洋火船（付箋「頗可ノ間多字ヲ加如何」）。過醉臥不識（知如何）舟達呉浦。宿酒商家。里正某々来謁。夜賽八幡廟。

契りあれハくれの二児による浪を　再ひ掛て結へる哉

十三日。安太至自須崎。（三字無之亦可）未後会里正演旨如昨。百郎門生遠（有）寄贈松魚半肉者（付箋「遠字恐不允」）。蓋最上番云。乃命晩酌。薄暮相携歩街上。至溪橋。柳條裊々蹠地。極有幽致。返逆旅聽街上譁声。云壮丁戯牽縄也。雑謹可厭。

咲残る花ハあれとも青柳の　いとに引るゝわかこゝろかな

「似安太和韵

「松魚最上番玉膾滿盤紅同臭相投處忘言杯酒中（欄外注記「刪去」）

「風の間を柳のやすむ夕かな

十四日。陰晏発呉。沿溪西南行。踰一山曰添蚯蚓。舍籌而歩。険峻（付箋「路険峻舍籌而歩ニ作如何」）。頂置小庵。曰海月。文化間常人聖心所建。山下曰常滑。溪間曰蔭埜。観有晩櫻着花者有感

人しらぬかけ野の里の櫻花　咲残るとも誰か見るへき

此間地頗高寒。地或（五字削如何）高山。故舁夫云。前日大墜霜穀草木。抵一村落。曰六反地。植人参。然多荒蕪。午飯柿木山堀内某。欲問龍之輔兄弟之事。或云蓋深諱人問。辞出大溪水曰平串川。雨岑々至。夜蓋豪。達明不歇。

茫鞋踏破幾崢嶸。猶見東風属晩櫻。一夜山中聽雨睡。不知明日是清明。

百郎甚五。将以明日分巡高陵。付櫻枝贈一首（所謂浅黄櫻。）二生来謝。話別。不能無悽惘。

中天の別れハつらし旅衣　あさき櫻のあひたらすして

十五日。巳後放霽。會近傍里正等。此處管轄最廣。凡一百餘村云。未後発窪川。処々溪澗暴漲。殆及籌底。或歩或駕。雨餘新緑（翠）欲流。憶少年曾遊。青山依旧。而白髪如此（付箋「作回憶少年曾遊青山依然而予白髪云々如何」）。不堪愴然矣。茅屋点々依山曰金山野。左見鬱然大山。曰行在。國中称行在者多。蓋亦係　養和潜匿之蹟歟（付箋「養和ノ下帝字ヲ加ル如何、歟字省如何」）。踰小坂曰嶺上。地最高隆。忽値下坂。曲々峻絶。曰片坂。為高陵幡多界。歩下坂而尚行山間。至荷稲。村吏迎路。云溪水暴漲不可渉（利）。且今夜所宿伊与木里正嘗有罪禁錮。因宿（付箋「且ノ下曰字ヲ加ヘ因宿ノ間留字ヲ挿如何」）。途中吟皆忘矣。録橘川一首。

早くとも初聲もらせ郭公　橘川の名をなくたしそ

十六日。稍霽会近傍村吏十五六名。巳牌発猶沿山腹下瞰溪水紺碧。藤花映帯。真一幀畫図。抵佐賀始敞豁。眺海絶佳。午飯里正某又會村吏。辞沿海行与安太攀松山寺。寺与蹉跎岬遥相對。抱海如玦。殊爲壮観。寺僧艶説所謂月字額及日野公歌文。余嘗有不是為蠡餘隻字。迂途貪勝遠攀尋。若教胥吏如儂意。待暁西堂看月沈之詩。青年客気粗狂如此。而今雖老猶存旧態（付箋「雖老二字宜刪」）。不欲區々展観。時夕陽将落。海氣蒼茫。遠黛迷離。或作金碧或作溌墨。流玩忘還。安太促之乃割愛。舁夫既揮去。安太亦為遺拿反路。予獨僕歩。蜑舍一簇。曰伊田曰有井。慨想元弘一宮王故事。処々海潮進

溢。溪水逆流。屢褰裳（付箋「処々海潮云々褰裳迄属刪如何、此アタリハ昔ヨリ潮ノ差込処ト覚居申候如何」）。抵上川口。水深不可渉。余与僕躊躇。有人覓舟渡。失路陷澤。漸出官道。東顧則月升松山巓。海風解駁。月色奇明如仲秋。會此佳境固足償辛酸（付箋「作東顧則海風解駁月升松山巓明朗如仲秋如此佳境亦足償路上辛酸如何」）。岐路易迷。値岬巌斗出候潮退疾趨。得郷者投宿鞭村正家。月色入戸。吟情躍々。

有井川ありし昔の忍はれて　月にも浮ふ人のおもかけ
数ふれハ三十の春や春あらぬ　老のかけそふ月もはつかし

十七日。冷氣如深秋。沿例會集（公事何如）。畢而発。曰入野行松。不知幾万章。皆良材。多胡枝。或謂万葉所稱小牡鹿之入野真萩蓋是也。西北折行田畝間。麦穂離々。今春米價騰貴。不知所抵止。朝野戚眉。但麦秋之仰。而今如此可喜。経小塚踰一坂。曰佐岡。沃野平曠。乃知府近。抵津口曰後川。当中村府後。宿目代横田某。々余友利岡平吉兄也。為傳平吉信。是日来訪者数人。曰山本健次郎。森碩太郎。木戸駒次郎。吉松万弥。木戸生齋示石川丈翁扁額。古隷勁勒。想像其人。又観詩仙堂詩畫巻。各自名匠。然既見六々翁。不啻野鶴之雞群。

十八日。雨終日朝訪楠目直吉于官舎（付箋「終日朝ノ三字刪如何」）。小談而去。木戸生恵酒及魚。晩由井畦三郎楠目直吉見訪。開木戸生所（此句削亦可）贈飲。碩太駒次亦来且飲且話。亦客中一適也。安太与目代訂澳内渭南地理宿処。余則醉眠不識。暁窮剪燈読書。

正是残花新緑初。山村投宿雨晴餘。恍然乍作家郷想。枕上吹燈讀我書。

十九日。霽。朝會府市吏。未牌移寓於安並。又告喩近村。主人佐田新八門生庫吉兄。晩畠中卓尓。谷本如水。碩太健次等来訪。惠大鯉鰡。乃命割烹。團欒解襟痛飲（付箋「團欒ノ二字削如何」）。吉松万弥亦来晤。談鋒争奇。興趣横生。余西巡至此。遇是数知己二三十年。無此況味矣。某々請余揮毫。乗醉一掃。雖拙悪亦勝醒時。夜深。醉眠不識客散。是日兼二微恙。余診之気上衝。乃命服大黄芒硝一匕。快瀉三四行。頭痛頓已。

念日。会者凡十一村。辞安並。留大楠公賛摺本為謝。渡四万十川。午飯具同里正。又会近傍。畢而南踰森沢山。険峻為近村最。舍輿而歩。兼二昨瀉下疲憊不能歩。安太為遅行。憩絶頂。俟僕不来。坂尽山間小村曰狼口。曰上長谷下長谷。皆荒陋僻遠。僅為生活。又踰一山。麓曰宮之川。郷者迎路薄暮投宿柚木里正城某。老樹圍屋。幽邃岑寂可愛。僕兼二甚遅（付箋「作屋外老樹岑蔚幽邃可愛。甚遅々甚如ニ作如何」）。命炬迎之。良久之来。云。安太周旋為賃竹兜子或馬。夜蓋二更矣。獨記紀行程。嵐気襲人。清極不能寝。暁得詩（付箋「獨記作燈下記如何。暁光所得ニ作如何」）。

溪声攪夢々頻摧。嵐氣籠窓暁未開。枕上得詩無紙筆。微吟低唱両三回。

谷底に八重櫻のいとよく咲たるを

谷かけておくれて咲る八重櫻　人しらすとも花ハ花なり

念一日。晏起匝庭除。平且清氣可餐。会事畢。午発柚木。主人送至邑堺。多叢祠。溪間曠野可墾畩。問之。云。人力乏且無水。以予観之、溪水可堤可沼。人種則徙之耳。況方今有育児令乎。屢渉溪水。云本一源而曲折如此。昨所渡某川。亦発源此。々間真幽谷絶人蹤（付箋「此間真ノ字幽谷ノ下ニ挿ム如何」）。穿過林莽中。固不可駕。有坂曰九樹。険急。憩頂上。重嶂連巒無所見。乾位僅辨村落。時聞怪禽声。或謂仏法僧。或云野禽。不詳何物。下坂更険。谷底多柏杉。矗々挿天。良材勝名越。余顧謂僕曰。人者人中。木者木中之諺不虚語。蓋有所競倣也。坂下為九樹村。始開豁（付箋「坂下始開豁是為九樹村ニ作ル如何」）。北折行曰有岡。此間湫溢。彷彿記昔遊不問而知為山田。宿里正兼松某家。々負山臨水田。緑陰掩屋。頗清爽。

念二日。主人多蔵書畫。観数十幅。有号唐司馬隣蘭亭右軍肖像。頗異常撰。予獨愛臺山々水。主人云。示之竹原々々亦激賞之（付箋「竹原ノ姓氏ヲ書如何」）。予竊喜眼光不誤。會集畢将発。橋上里正問育児事。乃授図説去。憩野店。藤花盛発。此辺平遠不似昨所経危峻（付箋「此辺作此際如何」）。道上始眺西海。抵津口。曰午背。渡則為宿毛。街巷殷庶。然比旧減十之三。宿番頭某家。途上國雅多忘矣。漸存憶意一。

行春をとゝめ兒にも松かけに　まつはれて咲藤並の花

念三日。公事了命舟。下午背川。風逆。傍大島而行。杙舟上岸。蟹舍蕭然。趨至南岸題名去。

契あれハくれ行春にあふ島の　磯わの色を今日見鶴鴨

筥師指点島嶼。最奇曰感陽。急把遠望鏡眺。而舟飄兀不能諦認為憾耳。横絶東南如黛曰沖島（付箋「諦認作諦視亦可、耳横絶ノ三字刪如何」）。云澄清。瞻豊山。烟靄不見。霎時達小馬頭。曰港浦。舍舟而歩。踰一山曰伊与野。小憩里正中屋某。門生格之進父兄姪来晤。又踰一山。々下曰小筑紫。昔菅相公西謫。泊舟於此。其称七日島阻風也。称網掛響松。維舟鼓琴。与松籟相答也。響松今槁矣。詣菅廟。

こゝも亦心つくしの跡そとて　枯て響の残るまつかせ

歩過漁街。又値小坂。沿海而行。山腹。凶潟夷曠。有北宗畫致。曰福浦。呼渡。踰一山。曰弘見。乃宿。時覚微疝痛。被衾臥。与安太抵掌談山水。安太説豆海勝。殆忘痾纏体。暁復微痛。急把酒濺磊塊。就残燈作詩。

千古風雲憶菅公。孤舟来泊紫溟東。蓬窓夢破多慷慨（有餘感何如）。月落峨洋遺響松。

念四日。巳後了事而発。行山腹。曠野多可墾。踰一山稍険。漁家数烟沿湾曰泊浦。午飯。乃航海（付箋「作午飯泊浦漁家数烟皆沿湾又航海如何」）。傍岸東南行。風涛阻却。揺櫓進（付箋「櫓ハ楼櫓ノ義舟ノ櫓ニハ艪字允当カ」）。奇礁怪巖。応接不暇。漸入小湾曰天地。換舟又航。浦正請随行。因指問近山島嶼名。晩泊栢島。々距地三丁。周圍里餘。蟹舍櫛比。現存一百七家。屋皆載石。宿里正沖新平家。西隣稲

荷祠。有二大樹。蟠屈殆蔭二三十間。蓋数百年外物。称神木。一在華表。下一在社側。拂葉必有新陳交番。里俗以此安産符。里正導予登山。暮色蒼然。不得窮其頂。是行不見豊山。不探沖島。最為憾耳。夜吉川某来訪。夜半颶風挾雨。震蕩磅礴。石屋欲崩。当此際忽発余疝痛復発呻吟徹暁（付箋「屋石欲落ニ作ル如何、当ノ字発ノ字刪如何」）。酸苦不可言。

念五日。朝風雨益豪。戸牖鳴動如震雷。云島中風烈如此亦常事。余痛未已。延島医鍼。覚稍易忍。晩又鍼。至夜風雨猶猛。擁衾堅臥不動。猶周亜父於軍中（付箋「不動以下削如何」）。

終宵磅礴戸牖鳴。撼枕涛声又雨声。堅臥擁衾悄不動。任佗風雨徹天明。

念六日。陰翳未解。力疾発島。主人新平等二三名亦随焉。云将適于樫浦（付箋「主人ノ字削如何、二三名随行云将適于云々如何」）。港内大堤横截海面。凡二三丁許。野中兼山氏所築以網大魚。島民至今受賜。真我神禹也。呼渡而渡。桭櫛沖諸島在咫尺。呼欲售。登坂曰篠津。極険悪。籃輿突兀不安。因復発痛。小頓絶頂。海眺最佳。風雨驟至。石路狭隘。籃輿数相軋磨。響徹痛処。酸若不可耆又踰一山曰青石。険亜篠津坂尽処曰周防潟。海湾如玦。礁嶼装点。小品可愛。又有坂曰十二児孫。険不減篠津。痛亦酷。暫入姫井村家。或欲投宿。然深山中不能驟辨。頻渉溪水。風雨撲輿窓。但聴淙々瑟々声耳。晩漸達犀角。宿里正家。急被衾臥。主人為煮紅花服之。痛未已。徹夜風雨豪。庭樹震蕩如波涛。半夜寤而不寝。痛亦頻発。無聊極矣。飲椿油半盞無験。

念七日。雨未歇。予痛亦未已。主人為延村医受灸法。覚少験。里正男曰市太。書生也。見質文三篇。改竄与之。又執左伝質問。余為略講寤生一段。聞浄福寺僧有辨才。嘗与都築生相識。余欲呼来会疾不果。都築余門生也。

おもひきや角の浦輪の雨の中に　暮行春を過すへしとは

念八。稍霽発犀角。南出海澨。曰尾浦。舁夫云去年一漁舎没波涛。其人攀樹幸免。而今亦同処。愚騃可憫。命航大津。換舟又抵貝之川。礁巌処々可観。飯浦正家。霜柏浦正畠中生。与下川口佐井生来迎。下川口憩佐井生宅。観古文書器物。書則　大祖宗伝公所賜。器則祖某征韓所獲馬鐙。刀則所佩以征韓。又観系譜。為細川家之嫡流。歴々可証。名族也（付箋「歴々名族也迄刪ル如何」）。辞出則装舟俟。籃輿行李皆従陸。畠佐等従余焉（付箋「畠佐ニ生ニ作如何」）。海岸之勝逈殊佗浦。予異而問之是三崎耶。衆含笑而不言。舟近岸曰千尋。絶壁断巌。疊成数千尋。又入小湾。巌皆剥蝕。巧緻可駭。遂至龍串。遥望之似小蓬壺。近観之如龍闕。刻畫緻密。鬼工神鑿変幻眩目（頭注「眩与奪ニ作如何」）。停舟流玩。欲上岸探討。潮満不可下（付箋「適以満潮不果上岸ニ作如何」）。乃維舟千畳石上。倒榼撫景満酌。奇興横出。欲羽化登仙。衆各題詩歌。碎石為筆。仰書絶壁。余因痾廃飲。至此不得不破戒。醉吟衝口。咳嘸為韵。佐井生欲随録之。予叱

而已。既而斜照映帯。忽做金碧李将軍家法（付箋「李将軍家法ヲ削如何」）。興未尽（四字無之亦似可）舟子促帰而且留以為明日之地。舟膠処曰当麻。宿三碕里正。門生沖生之兄也。又命飲。請揮洒。把燭作劈窠字。醉趣淋漓。始掃尽頃来病魔。是日詩歌極多而皆忘矣。佐井生為吟一二。

今日ハしも浮世を出て龍串や　龍の都に我ハ入けり

世の中をわたりかねたる老か身の　現にかゝる夢の浮橋

鳳皇の炙とは聞しかと　龍串にして飲ははしめて

念九日。晴公事畢而復探龍闕。途得一導翁首従、東南多所謂珊瑚砂（付箋「導翁作嚮導或ハ導者如何、所謂ノ字刪如何」）、一童為予拾之、翁踞前一々指点唱名、皆命其形肖原号四十八景、後好事者増為八十八、又後加十二併至百景、非宛然不肖而牽合亦多、且命称極俗、欲記遂輟、到南岸更奇、驚神駭膽、令米顛遊殆顛死、衆絶叫弗已、復至昨遊處、臨所謂夢橋、衆多難色、予狂態又発、不能禁欲鼓勇而前、佐生兼二請先登、予落後獨度、畠山二生逡巡、迂路出濱、則装舟俟、抵越浦非不奇、而既観竜闕、真難為水舎、舟踰小丘、清水浦生濱田八木郎倒履喜迎、飯其家、正元故家、祖某嘗与藤堂公高虎友善、高虎出就功名、祖則隠里正、　大祖宗傳公嘉其高蹈、数召賜物、乃出示所賜古刀（三條宗近）文書、男某請入門、浦吏正近森万作亦来晤、余旧門生也、八木郎今年六十一矣、温藉好國雅、請伴、呼舟共渡港、八木指教馬頭諸勝、天造大馬頭本州為第一、須崎亜之、渡口溪間碧水潟出、是清水之所以名、一掬覚清快

真水に心洗ひし今日よりそ　世のうき波に汚さすもかな

晩宿中濱、観南海淇園梅竹、南海最佳

晦日。了公事、里正将出高知府、贈礼弟書及文具、付以此什

薏苡を珠と疑ふ人なくて　拾ふニかひのある世なりけり

命舟観所謂臼巌、此間絶勝雖善、畫者不能描万一、試令畠生模寫果不能彷彿突兀石山有骨無肉、石質皆帯鐵鏽云、全山悉鐵、不特臼巌為鋼鐵、海潮一道迅駛如箭至此、直東朝放八丈、入蝦北日本（有蝦北別称日本者）所謂黒潮也、漁人云、今年必多松魚矣、蓋松魚喜溯是潮也、畠生云、嘗祈漁於臼巌、載巫三匝此巌、巫眩仆顛倒、須臾達松尾舎舟、飯浦正、々八木郎長男又出示古書法図畫、有一休禅師真蹟及一条経家公歌、其佗不暇尽展、又観小屏障、古金色爛然眩目、亦

太祖公所賜、不覚移晷、舁夫待門外、乃辞去、舁夫雑漁婦力或勝男云、足指頗仰、入蹉跎山麓、老樹鬱勃、白日昏翳、最覚霊異境、既而抵大梵刹、廣袤二丁餘、古昔有十二坊、今則廃頽矣、欲訪住持、辞以疾、蓋耻之也、門額署補陀落東門五大字、　嵯峨帝宸翰也、浮図猶存云、源満仲所建、渡辺綱督之、乃南探所謂七奇、曰天燈龍燈松、曰龍馬篠、曰動巌、曰潮水干満石、曰不増減水、曰龍石、曰午時雨、衆嘖々艶説之、予不必一々討窮、先登南岸、峭拔数千仞、直挿南溟、俯瞰其下、巉礁盤錯、雪噴露噀、或有巨鼇出没、進香者以鼇出為獲冥禍、又有称鍛冶巌、往歳雲気所発、蓋亦金鋼之精也、人禽皆惧而不敢近、質里正亦云然、或云、是巌出没変幻、若有物役之獨立岸頭、裂眦不見山浩々然、若有所得而目眩脚酸、不可久立、乃下観臺今廃矣、時嵐氣、海風清冷迫人、恐発宿疾急命籃

輿、就下坂、蹬道乱石、不能下歩、二里強而宿窪津、則燈既点矣

紀行歌詩　西巡紀程抜萃

我か為に誘ひ残せる山さくら　春の嵐は心ありけり

草枕花に霞ニワけ迷ふ　春をうきものと誰かいゝけむ

よしさらハ春の一重ハ過ぬとも　また八重桜たのもしけなり

更に又昔の夢の忍はれて　事問まほし一本の松

藤浪に紫つゝし色そへて　春深けにも見ゆる谷川

昔誰辛きうき世に関すへて　塩九升坂（シヤクチヤウサカ）と名には立けむ

注、須崎の入口ニあり、昔関門あり、塩壱斗に及へハ税を出さしむ、故ニ過るもの皆、塩九升（シホクシヤウ）と名告て行、終ニ名となるとそ、今しやくちやう坂と云ハ訛なり

茫鞋踏破幾峥嶸、猶見東風屬晩櫻、一夜山中聽雨睡、不知明日是清明　宿窪川

浅黄桜と云ものニつけて島本乙政二生に贈る

中天の別れハつらし旅衣　あさき櫻のあひたらすして

有井川一宮親王の故事を思ひ奉りて

有井川ありし昔の志のはれて　月にもうかむひとの面かけ

溪声攪夢々頻摧、嵐氣壓窓暁未開、枕上得詩無紙筆、微吟低唱両三回　宿柚木山中

夕日かけ落て流るゝ心地して　水にうつらふ丹ツゝしの花

行春をとゝめ兒にも松かけニ　まつはれて咲藤浪のはな

こゝも又心つくしの跡そとて　枯て響の残る松風

小筑紫ニ響の松と云あり、菅公嘗泊此報琴今枯矣

千古風雲憶菅公、海江投宿紫溟東、羈窓夢破多慷慨、月落峨洋遺響松　宿小筑紫

唖の川と云地にて　滄浪と云も地名也

口あれといへぬ浮世のおしの川　なかれ渡てそふろうふの水

終宵磅薄戸牖鳴、撼枕涛聲又雨聲、堅臥擁衾悄不動、任他風雨到天明

龍串詩歌許多、皆忘矣、追録一二

今日ハしも浮世はなれて龍串や　龍の都に我ハ来ニけり

世の中をわたりかねたる老か身の　うつゝにかゝる夢の浮橋

鳳皇の炙とは聞しかと　龍串にして飲ハはしめて

薏苡（スミタマ）を珠と疑ふ人なくて　ひろふニ貝のある世なりけり

清水ニて

真清水に心洗ひし今日よりそ　世のうき波にけかさすもかな

南海にて釣を垂る

南の海千尋の底ニ釣たれて　幾千里なる魚を釣なむ

又入山邨出海郷、斜風吹雨度溪程、輿中傾尽残瓢酒、愛汝飄然似我軽

おもひきやいつか契りて降雨に　いつた坂を越わひんとは

五十年の夢路をたとる心地して　昔恋しき雨の夕くれ

酒醒燈冷奈難眠、隻枕撫来轉悵然、相憶他年君記否、雨昏四萬十川船

燈をかかけ尽して文見れハ　旅とハ更に思はさりけり

世の中を渡の川ニ引舟ハ　くるしき海にまさるなりけり
名にし負はゝさたかニ名のれ子規　初聲聞かむ佐田の山もと
夜もすから正木のかつらくりかへし　言語らなむ今日を初めに
　右、正木徹吉郎ニ贈る
ものいはぬ桃の源たつね来て　道ある里に我ハ入けり
　右、半家村、所謂義村也
人生老去轉多情、酒醒無端思故郷、證得山中一夜雨、花残緑満杜鵑鳴　宿十川
朝またき軒はもワかす霧こめて　蛙鳴なり十川の里
行春を惜ミ尽せし鶯の　聲ニおとらす鳴かはつかな
たひにして春ハくれけり郭公　心もあらハ初音聞せよ
呼子鳥友呼つきて山さとハ　淋しきものゝにきハしけなり
緑樹隔隣遠、白雲遶屋閑、忘言相對坐、窓外夕陽山
　森生官属ニ別る
来なれてハ幾日もあらぬ客衣　けふきぬ〳〵とおもひかけきや
いつしかニ廻り〳〵て玉くす氣　再ひ海の月を見るかな
　右、海月庵
寄浪のかへす〳〵も悲しきハ　消てあとなき昔なりけり
　右、呉浦にて先考の事を思ひ出て（四月十三日先考忌日）
憶昔曾遊陪乃翁、青年白髪感無窮、追随半在遺蹤地、夢遶越山呉浦中、越山地名
　贈田所宗次　往来両度相逢、話的在須崎
契あれハ又あふ坂のさねかつら　春より夏にかけて来ニけり
畫くとも筆やハ及ふ浅みとり　色ふか浦の雨の夕くれ
屈指曾遊四十年、客心憑吊両凄然、西窓残燭如斯夜、細雨江山夢
釣船　裏湖次作韵

「西巡紀程　第二集」（明治三年四月一日～五月十一日）

（表紙）
「庚午夏四月
西巡紀程　第二集
晦堂老人識」

（明治三年四月）

四月朔晴、朝了公事、訪亀谷生、々請講、豈好弁、講後酌別杯、一老夫人携丹醸来、余不覚沾醉、生出示小倉色紙（所謂見せはやな）、付鑑賞家印数紙、真稀世珍也、又観一亀玉、云生父某嘗憐亀見屠、一日見巨亀死、腹中産此玉、蓋有所報、可謂一奇事、頻乞作書、乗醉揮毫、老人請酒詩、即録和陶詩贈、辞出門、老人請余過、又命飲、固辞不聽、挙一杯去、碎珊瑚一枝見贈、蓋同宗受恩者云、登船南溟垂釣、老漁忽得赤糸魚、溌溂飛動、余興趣勃然試釣魚、煮所釣生魚命飲、酒即丹醸、肴則南溟之生魚、不得不満醉、与濱田老人頻応酬、且吟且飲、老人亦敏捷、咳唾悉可歌
　はてもなき千ひろの底の鱗も　いとニよりてハかゝるとをしれ
時漁舟帰、相迎買琵琶魚及魴、乃為下物、余昔年遊須崎、以後無此

奇興、既醉眠不知舟達霜栢、繫舟于大船下又飲、夕陽春處、舍舟投畠中生家、々臨大洋負山、幽邃如両相伴、浴後呼枕、忽聞櫓聲、主人云、松魚也、乃為鱠又更侑、殆不得辞、故人情深於南洋、是夕聽与大洲土冦凡一万四五千人、発端苛政、有二十八條歎訴云々、吉田領亦応之、凡三四百人許

八木郎老人か海柳と云ものニつけて

浅緑岸の柳におとらしと　海にもふかき色を見せけり

南溟千尋底に釣垂て　幾千里なる魚を釣南

二日、喫午飯発霜栢、稍々入山間、雨且至、坂路稍険、曰伊津多、遂雨大至、抵津蔵淵、砥石所出、雨濛々、抵正木乗舟、風雨尤豪猛、輿中亦沾濡、竊傾残瓢慰旅愁、震雷亦甚、衆大惧、漸達下田、入巨商山崎某家宿、主人亦請従余学、門生二三人命酒、因満醉忘疲憊、吟哦衝口、以為排悶、家婦蓋濱田八十郎妹、善國雅、出侑酒、且吟且飲、興趣尤佳

又入山邨出海郷、斜風吹雨度溪程、輿中傾尽残瓢酒、愛汝飄然似我軽

思ひきやいつか契りていつた坂　けふ降雨に越わふるとは

五十年の夢路をたとるこゝちして　むかし恋しき雨の夕くれ

酒醒燈冷悄無眠、隻枕撫来枕撫来獨悵然、相憶他年君記否、雨昏四萬十川船

三日、新霽、朝就梵刹會里正、丁発主人命別杯、又喫一二盞出、抵竹島乗舟、遡達中村府、又投宿目代横田某家、恰如帰家、夜招飲、楠目直吉官舎、詳聽土冦事、是日亦吟哦、醉中皆忘矣、讀漢魏叢書

獨掲残燈讀我書と題せしを思ひて

燈を掲尽して文みれハ　旅といふをハ打わすれけり

四日、大雨傾盆、監察来報云、土冦益張大、且藩境山民有少動揺意、因急命舟発此、天稍霽、西風猛烈、遡四万十川、風逆瀬急不得上、竟泊一処、命陸行、踰一山輿行、出後川上大風殊暴、欲吹倒人、傍山腹行、下瞰大川、抵佐田里正家、又命舟、艱苦曳上、行里許而舍舟、行半腹、晩抵悪瀬々小憩、風威最悪、吹飛戸牖、不可久留、即辞出、猶沿水山行、時夕照落山、々水絶佳、但以風暴為憾耳、漸達川登山村、里正野村雄義技迎路、右生今朝来謁逆旅、入予門、是日途中得國雅最多、僅記其半、夜命飲慰疲、真率可愛、飲中説手洗川貧婁状、為之惻然

世の中を渡の川に引舟ハ　くるしき海にまさる也けり

暴風渡の川を吹あけて　浪の山なすとよめきの里

萠いつる青石か森のわかみとり　あらくな吹そ夏の山風

きのふまて浪の荒磯ニ碎かれて　けふハ安瀬々に溯けり

辻風谷の青葉を吹巻て　とめきの山の鳴とめて也

桃の花咲源に入ニけり　悪瀬々の川を川登して

卯花の咲ちる岸に落合て　色を争ふ瀧の白絲

引舟のくるしきよりハ中々ニ　かちゝ歩行　山こゝしとも

乗人も乗行人も諸ともニ　くるしき海ハ渡かてなる

名にし負ハヽ定かニ名告れ子規　初聲聞む佐田の山本里

是夜、貝同入田里正亦蒙命抵川崎、々々参務由井畦三留宿為鎮撫云

五日、晴、晏起、風猶不已、山窓頗閑寂、就暖讀松陰所注孫子、甚適意、有一種奇味、孰謂松陰粗暴家、真能讀書也、集會事畢、巳牌発此、兼程欲至川崎、命舟遡急流、或曳或推、溪左小村曰高瀬川、老柳五六株、翠陰可愛

高瀬川繁る柳の影見れハ　都の夢の面かけニたり

又茅屋点々傍山、曰蓼川、里正随行、舟中話土冦事、川左曰楠村、抵鴉ノ江、忽逢下瀬舟、云従川崎含参務命傳致予、曰岡村章吉軍務使部也、詳聽土冦動静、及江川辺事情、稍属平穏、聞府下遣兵隊、恐却生激勢、故急報此事欲罷兵、因得審其情実、始安堵矣、土冦事別記、不復贅此、事了告別、則舟已隔矣、上下勢之異如此、川西曰勝間、結屋五六十、西北見奇峯、問之、云姜峯、即有歌

川登山越谷路かろうして見るもかしこき姜の峯

又北方見高山、云萬丈嶽

鬼住と聞し丹波ニ増るらん　萬か丈の山のこゝしさ

抵窪川舎舟、憩里正午飯、又会村吏、日已迫未牌、以急湍多、傍川行半腹、里許曰半村

山けはし日は傾きぬ道問へは　いまた半の里の名もうし

又命舟曳上、余授匂紘法（匂紘カ）、山民固陋、頗難色、強後聽、漸以悟其便、繁華児童、莫不解此等事、可一咲、然有機事必有機心、風氣随開、亦随有害、無乃固矣聖語可省、既而達津野川、村吏迎津口、云請宿津野川、乃入宿、日已晡、番頭大里正曰正木徹吉郎迎門外、森碩太郎亦在、云以由井参務之命、従此請随、因亦聽江川事状、即命此、主人亦請命飲、不太辞、与且飲且談、主人徹吉、蓋正木哲馬族、琢一郎之義弟也、謹厚而帯感慨、可愛

夜もすから正木のかつらくりかへし　こと語ら南けふを初めニ

是日所得歌数種渾忘却

六日、雨晏起、讀諸名家詩集遣客悶、亦一適也、其尤者特有高啓詩醇耳、中字地里正等後至、乃召示諭、畢而発、蓋巳牌、抵川崎、少憩里正宅午飯、正云、由井参（務字脱カ）今朝発此帰中村府、余路上見一蓬船、蓋是也、因亦聽与方事状、及境内情実、云川口村弁吾、某村菊太郎二人、昨夜就就捕、尹蓋嘯集山民者、弁嘗為盗、遇赦而帰之悪棍也、自逮巨魁、忽就静謐云、由井参務以此帰府歟、飲了即辞、沿水行、此辺水磯乱立可観、問名輿夫、曰野猪之尻、不覚失咲

濟かへる野猪の尻なる水玉ハ　矢を負しよりかくハあれけむ

溪前茅屋点々、曰長生

世にしらぬ渡の川の水上に　むへ長生のさとは有けり

遥指前村出没樹間、曰半家村、所謂義民村也、今猶古、夏避秦桃源也、乃小憩里正家

ものいはぬ桃の源たつね入て

桃花下照水を上りてハ　道あるさとニ出ニけるかな

米なくは上白米のはけの村　世の黒米よ鏡にもせよ

物いはぬ桃の源尋入て　道ある里ニ出ニけるかな

谷氏丹四郎北溪為義民村記、近時浪華後藤松陰亦為記、最詳且雅也、里許曰江川、投村吏宅尽残盞、日旦申後、涂山聽水聲、閑静最佳、把筆徒録陰晴、雨蕭々、門臨大溪、曲肱一眠

水の音のかしましくにもおとろかて　午眠の夢のいと静也

二助教別宿、夜亭主命飲、有野衲曰長生寺、呼来共飲、蓋大休和尚弟子、粗遊歴諸州、然無些見解、亦無文字、但朴野善話可愛、至夜分亦客況也、枕上得詩

人生老去轉多情、夢覚(酒醒)無端懐故郷、證得山中一夜雨、花残緑満杜鵑鳴

七日、雨稍霽、沿例示諭、且作喩文、申命當時事情、午飯後発、沿行山上路、有碧潭危巖、曰君渕、路上遇一書生、云徳弘園衛、与安太話、学医于与布天民

民草の繁るニつけて深山へも　君か渕瀬を仰かさらめや

抵山頂小憩、「鴉カトマリ向ニ半度村アリ、幸ノ川ト云」俯瞰山下、澄潭、時見筏数個下急流、畫図亦不及、舍輿歩、「長走村川口、見猪先弘瀬、今城数村於川向」又抵一夷處憩、「松下小仏、醜獰、可悪、」川左村落、傍山曰某、亦十川之属、申後至十川「七村惣名」、又曰大野、宿番頭庄屋「岡崎彦四郎代、曰彦二」、復發疝痛、即蓐上、主人為作蕃薯油製喫之、又好麦飯、皆隨好、夜出酒、余以疾辞、二助教等皆飲、因詳近日事情、是所以不厳拒命飲、到處皆説三分一之税、價太齟齬、実不堪聞、里正苦心可想、余帰後欲為疏辨、然不能無小遺憾、可歎慨、獨吟排悶

山川の奥にも繁る民草(夏)に　恵の露の何無るへき

八日、朝冷如秋、大霧埋屋、咫尺不弁、但聞水声淙々、与鳴蛙喨々耳、尤覚幽邃、擁衾静座養痾、雖不太痛、未判然

朝またき軒はより先霧こめて　かはつ鳴なり十川のさと

行春を惜み尽せし鶯の　聲におとらす鳴蛙かな

客にして春ハ暮けり杜鵑　こゝろし有は初音聞せよ

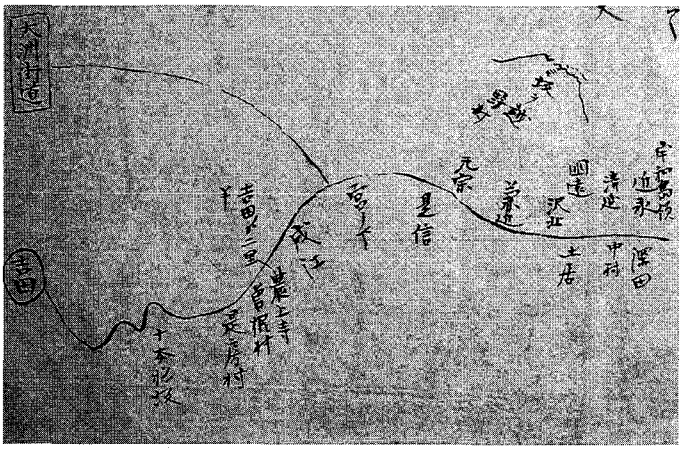
巳牌、岡村魯吉有報云、中家地正高添恒吉、探吉田土冦、五日従与宮ノ下飛報曰、土冦益張大、三万石悉皆為賊、勢甚強傲、固哀疏、但待郷録公来臨(郷録公、人名未詳、蓋指家老歟)即命僕急写飛報及図、予亦略図之「後聞郷禄上大夫、通称伊左衛門、今隠居」

巳後、会里正等及伍長、力疾諭説、不能懇到、委属官、然此間山民、既見誘動於姦徒、不可不反覆申命、午前将発、再發痛、不得已又滞、此夜劇痛、獨呻吟残燈下、不能一睡徹暁、遂呼起僕、老主人亦来、為下針、或飲猪胆及椿油、覚稍愈就寝、一睡至日出、是夜杜鵑頻鳴、又聽鳴蛙、呻吟中得歌、皆忘却無跡、是日観十川七村地図、頗詳

九日、晏起、痛已、午後辞此、沿水屈曲行東南、安小祠、云祀新田義興、未詳其故、路畔多巌松、踰一山曰細々下、曰四手、小憩箕越峠、野廟中見大樟倒、大蔽数牛、北見遠嶺重畳、所謂大嶽、天狗嶽、障子峠是也、又小憩曰浦越、行山半腹、下瞰溪流最佳致、見小

村落、不記名、下山曰田野々、投大里正（曰森田弥之吉）、門前山谷、平夷豁如、暮色蒼然、静閑亦極、余對此忽有窮山長往之想、悵然久之、因憶山静似太古句、以此為韵、欲作五絶、病懶即已、新緑滴窓、鵑聲遶屋、殆忘疾在躰矣、夜剪燈為日記、是日無一詩歌、主人出酒、余以痾辞、下僚皆飲、及暁得此歌詩

呼子鳥友よひつきて山さとは　さひしきものゝにきハしけなり



ふくろふの夜たゝ友よふ聲ハして　山静なる明かたの空（十川のさと）

緑樹隔隣遠、白雲遶舎閑、忘言相對坐、窓外夕陽山

是日無會集、蓋以予疾、会者多散故也

十日、暁雨蕭々、従此森生帰中村、已前与森生別、為贈

来なれてハ幾日もあらぬたひ衣　けふきぬ〳〵とおもひかけきや

午後発、雨暴、沿川行山腹、溪磯激水噴雪嚥霧、前曰轟崎、後曰芹轟、小憩頂上、曰下岡、岡上、予感冷気又発痛、漸投北之川（北村）里正（詳七）正、呼枕保護、主婦為按摩、又呼医鍼治、足半退、就寝、夜半再発、獨擁衾坐徹暁、岑寂無聊亦極矣、簷滴稍稀、知雨霽、思極而却無詩歌

十一日、新霽、「医又来診、贈謝儀」、公事了発此、路上忘痛、沿水踰小山、頂曰船戸越、幡高分界處、是日予恐痾不下箒一歩、抵秋丸、入山家午飯、是辺稍平夷、然傍水遡、可見見水中老樹葱々可愛、問輿丁、曰須良之川、安天妃宮、蓋有霊物、人恐不近、過大向、若井、口郷等、抵川津呼渡、曰悖牛渕、上曰鴉巣、蓋有槿花宮故事、膾炙口碑、未半投久保川、前所宿吉田保蔵家也、夜無事、暁微痛

すらの川中洲の森の若楓　赤に緑に色よそふ也（そことなる）

十二日、微陰、辞窪川、迂途詣五社、西北折行、踰小丘渡川八九丁、遥仰鬱葱神林、里正及神官岩崎肇者来迎、先拝東方第一社、「次第礼拝」、蓋祀孝霊帝及皇后太子皇族某命、岩崎生詳告神号、随

聽随忘、後世或称佛号、固不足辨、小憩、岩崎生家、暫話、且略云祓除祭法、余昨来時、路認祓除牘問之、云神主父某所命、某谷萬七門人、頗好古学、近年目盲、乃出接、父子皆朴実可愛、「欲拝神宝」、丁夫以無午食即辞出、路傍村曰宮内村、問郷導葛西氏先塋何在、為指点、因遥拝、葛西氏余家外族、嘗貶此、全家罹疫悉没、蓋世大埇里正、好学最嗜神典暦数、所著数部多湮滅、可歎惜、沿水行田間、見突起高峯、曰天日峯、天日某城趾、所謂仁井田五人衆之一也、踰小丘、抵柿木山午飯、是畦見稀挿秧、又行山村、蔭野、常滑、来時所経、如記如忘、路傍観官薉園、今朝里正云、薉近荒蕪、蓋官有所不省、見贈一本、曰中品、余固不知与雲薉何伯仲、踰副蚯蚓坂、憩絶頂海月庵、題壁

いつしかに又廻り来て玉くすき　ふたゝひ海の月を見るかな

屈指来時、憩此客月十三日矣、唐詩云、又逢辺月両回圓、此行亦久哉、下坂峻絶、舎籥試歩、病脚躊躇不可歩、又乗行、申後投呉浦旧逆旅、浴後呼枕、無公事、殆解綬漫遊

くれの西長宗と云さとにて

路とへハまた長そふと答けり　日ハくれかゝるいそき行なむ

行飯街上、不覚至海濱、見二児島畔月朦朧、不堪客況

思きやくれの浦わの二児島　再ひ廻る月を見むとハ

今夜當先考忌日、憶考嘗為此浦吏、屈指已五十年矣、惻然為吟、終夜無痛

数ふれば五十の春もくれの海や　二子の島によする白浪

寄る浪のかへす〳〵も悲しきハ　きえてあとなき昔なりけり

廣幡の八はたの神にぬさまつり　祈りしことは昔なりける

往年倍先考西巡、考時疾、默祷此矣

憶昔曾遊陪乃翁、青春白髪感無窮、追随半在遺蹤地、夢遶越山呉浦中、越幡郡村名

十三日、微陰、朝航須崎、無風海面如熨、指点奇礁巉巖、排頃来山中鬱悶、復投宿里正小島熊吉、田所宗二忽然来訪、命酒割鮮、述別後情、余比日

禁飲、至此始飲、良朋相会、松魚活溌不得不沾醉、酬酢稍久、欲相共訪宮尾啓齋、不在、乃訪安太郎、匆々辞去、就逆旅看書消遣、夜蚊多、主人出書画、便面数数十柄、皆近人且多藩書生、幡郡飽古書図畫、不欲多看、夜無事、燈下看書遣客愁、水雲問答、松陰文稿二冊子粗了、是夜始下蚊帳

釣そめの蚊やのにほひや子規

蚊一ツにけ避まわり客坐敷

宗二に贈る

契あれハ又あふ坂のさねかつら　春より夏にまつはれにけり

十四日、巳後發須崎、踰鳥越坂時、又遇宗二、従輿中談、蓋天縁也、抵名古屋麓小憩、又憩絶頂、露裏湖半面、可馳看、坂尽曰戸波、投宿駅亭、主人不在、云里正有患者、故移此矮屋、安太別宿、申後喩事畢、岡林生請献一杯、乃留安太、團欒作書生談、松魚新鮮、猪肉肥甘、加以此真率會、露尽書生旧態、可謂愉快極今夜燕

矣、然半思民苦、半思詩之念不能無、呵々、醉後獨歩於月溪山間、前山曰遅月峯、突起群山中、氷輪當其頂上、亦難多得

おそつきと名にこそ立れいと早も　月は小峯にさし登けり

いささらハ溪の流に枕せん　瀬の音も清し月もさやけし

吟情如湧、衝口獨吟、多忘却、然詩則或得一句両句、多忘韵字、固懶足成、帰呼枕、齁々達天明

はしめて蛍を見

澄月に己か光もけおされて　むくらに潜む夏虫のかけ

十五日、晴、麦寒、朝氣清爽可愛、獨歩庭際、新緑翠露如雨、憾無友耳、又披松陰文稿、一尚友也、中有富永有隣字説、足概見為人、云富永徳、字有隣、自見甚高、疾群小如仇敵、由是為時流所擯（ヒラカ）折、親戚所不容、嘗處於流、尋錮於獄已一年、余亦有罪陷獄、相得喜甚云々、勿以己責人、勿以一廢百、所長略短、察心略跡、則天下焉往無隣、雖世乏豪傑、要其自立者不少、而又何至仇視群小哉、抑吾相君状皃、非死于獄者、修徳得隣、亦可以成事矣云々、讀到此殆亦如為余作、爽然自失、已前辞此、沿溪水行、岡林生送到七八町許辞去、東南折入溪口、曰浅井、有天満宮廟、称二本松天神、登山稍険、舎籥歩、小憩頂上、俯瞰裏湖三分之一、具半幅畫致、下坂峻絶、然不甚遠、八九丁郷導迎入出見村吏刈谷虎八郎家、依例施集會事、発此迂路過千光寺、拝所謂花山院神位、住僧出開扉、郷導云、有称御陵地六代、果見一森鬱處、神氣可仰、有老橘樹、盛着花、又云有老桜、今枯矣、蓋擬左右桜橘也、然古傳太可疑、或云南朝王子玉川王、或云一公卿称花山家、因附會、余則以為南朝王子説近是、俗傳玉川都水吟亦可証

古を忍ふか並に郭公　なれも涙を添て鳴なり

命扁舟渡裏湖、篙師指云、小石磊々処曰鼓巌、左方小村落曰志和井、右曰接木、曰虎気碕、曰大崎、皆可観、深浦猟家数点、一古松臨江最奇、此辺勝景、雖元暉恐不能摸、時欲細雨、遠近山色摸糊、不可名状

畫くとも筆やハ及ふ浅みとり　色ふか浦の雨の夕くれ

撫景獨酌、不覚一睡、則舟已岸矣、曰福島、児女数十為群云買米、漁村窮乏可憐、此辺夫敖皆出漁、因婦人擔行李、舁籥輿、笑語嘩然、亦一奇也

草まくら生めく聲ニ夢覚て　つもりしうさも忘られニけり

不見郷導、婦女且導且舁、漸到村吏家、倒履出迎、云不見所謂向打、故狼狽至此、謝不已、安太亦謝其失余、余云已矣々々、何足介蔕、乃宿此、剪燈記路程、窓外但聞風雨聲

雨風に立白浪の音そへて　むすはぬ夢の碎ぬるかな

憶少年韵賡之以賦

屈指曾遊四十年、客心憑吊共凄然、西窓残燭如斯夜、細雨江山夢釣船

浪の音軒の滴にかねてより　ねられぬ客の夜半をしそ思ふ

終宵暴風雨、到天明則歇

十六日、新霽、例事畢発、朝来覚腔裏微痛、否鞭快々、踰戸波坂、

石路兀々、険亦甚而不能一歩、達絶巓憩、有小店、老翁獨守、云嘗遇盗、迫奪拾貫銭、為之惻然買点心去、下坂却夷、須臾抵塚地溪、々口人家皆石工、各製碑云、就中池田兄弟碑尤豊大、余在輿不見、投高陵村吏家、呼枕臥養痾、令僕買大黄芒硝末頓服、観一齋老師七律大幀、老勁可仰、和琴廷調韵者、門中活心上秋折字、膾炙人口、然在先師恐不為上乗

客衣千尋の丘に打振ひ　うさの入江の浪に洗ハむ

是日、無歌、僅有此一首耳、晩、会集、事了就寝

十七日、晴、早起無事、急命竹輿、取路於捷、踰荒倉、午飯朝倉、帰家、々人喜迎、時未後、微醺午眠、屈指殆四十日、亦近年之客程也

十八日、晴、無事、告帰郷官、養宿痾

十九日、晴、無事

廿日、晴、無事

廿一日、晴、禮弟来晤

廿二日、晴、無事

廿三日、晴、疾愈出館、呈喩告二通於大参事

廿四日、晴、出官、無事

廿五日、休暇

廿六日、出官、晩過蓮沼寓、会諸生四五輩

廿七日、不出官

廿八、出官

廿九日、出官、無事

「東京日記」（明治三年五月～七月）

（表紙）

「　明治三庚午

東京日記

夏五月十五日　高知藩　奥宮由」

（表紙裏）

「　東京人物譜

越前、大村龍也、在東久世殿邸中　陽キ山見龍院家来、小笠原寅二郎、延暦寺出張所用
杉山某、寓城戸参議
昌平橋外、神田孝平　水通橋内、臣（オミ）三郎
生田、〓〓　〓〓〓　戸梶　二十
炭酸達曹（クンサンサウタ）　二分　一ヒン一分弐朱
酒酸石　二分

十月廿五日　〓〓〓　静岡藩、津田慎一郎、刑部小判事

白銀町三丁目、原口屋、越後者宿　樋口屋、八月末
補精圓
陽起石二両、肉蓯蓉二両、巴戟天一両、龍骨一両半、蛇床子一両、蒼求一両半、青皮一両半、竹節人参一両
〆八味、細末蜜煉、酒又白湯ニテ用ユ、日三次
ツキチ、寺島外務大副　」

（明治三年五月）

明治庚午夏五月望、余以喩俗司都教蒙命適東京、未牌離布山、送者至橋下、買船抵浦門、徙于蒸気船（顔）タ、従者謙之及僕兼二、同船漾生也、晡時発浦門、上甲板眺山海、須臾過東灘、夜飄兀不寧叵眠、稍有注氣、入船中堅臥、偶憶頼子成詩、因用其韵

裂眥西向無呉越、開雲東北度窮髪、鵬挾長風翺且翔、龍蹴雲涛出復没、奇絶平生真難得、大洋併看梅雨月

十六日、微陰、晩晴、船向東北走、観紀山于左方、晩観勢山、余注気未消、謙児不甚、晩飯後又上板上、云及遠灘、夜快寝
舟向扶桑東復東、過宵磅礴震雷中、不知身無落何處、夢騎長鯨凌海風

十七日、晴、早起、観蓮岳、予別岳十年矣、恍如遇故人、喜可知
邂逅に相見る今日の嬉しさハ　ふしの高ねに積る白雪
未牌、過豆海、観諸山、舟子指点教余、随聞随忘、唯記天城山之高峻耳
昨日にそ浦戸ハ出つれいつの海や　天城か峯にかゝる白雪
夜半、火船益少傷理之、又発暁達品海

十八日、晴、早起、従品海上陸、於船肆朝飯、経高輪入東京、折田町、北行穿三縁山中、小憩愛宕、未前達上邸、又出、午飯、買諸品、晩細留氏招飲、晩雨、夜早寝、寓在本邸北十七号、後轉十九号官舎、又徙二十一号

十九日、新霽、午後訪児収於大学黌邂逅、暫話、遂相携歩東台傍、観戦場銃丸痕、抵浅草観劇、日晡与児別帰寓、夜無事
念、晴、訪佐々木参議於駿臺、不在、又到昌平校遇児、相与歩市

街、未後又訪参議、以病辞、晩帰邸、夜児収宿寓

念一、晴、巳後拉児等散歩市街、抵両国下、聴演話師、晩酔帰

念二、晴、官脚発付書信、小野生見訪、暫話、未後訪佐々木・齋藤両参議、話移晷、夜訪長岡生於民部省、更闌帰

念三、朝、為書生講大学、午後散歩市上、詣神明社、浴後帰、夜雨蕭然、長岡生折簡見招、余不在、故不訪

念四、雨、講大学、午後拉安彦訪長岡生、談話至日晡、愉快、近日所無、酔眠半字許、揮毫為娯、是日児収来、余不遇、夜無事

念五、晴、出官、談事於大参事林亀吉、拉謙児至邸学黌、嘱正木琢一及片岡氏、児収俥来請金、然俥不知何者、故不与、明日必可来、否則余往

講前

念六、晴、適大学校、児不在、訪芳野金陵、講前履満、戸外暫話、辞去、繞上野辺、欲雨急帰、贈寒貝佐氏

念七、晴、暑甚、午後与岩崎介吉訪穂積亮之助於三絃講、談話移晷、尹蓋主張中庸観、其所著大意侭好、晩飲一酒楼、酔甚、夜帰

念八、晴、暑如昨、無事、謙之与佐々木氏買舟、観烟花於両国、夜十二字帰、余亦夜帰、至暁火両国橋北、云近箱崎邸、々内倉擾不已不能寝、至天明歇、防火丁皆出云

念九、晴、暑、無事、朝児収来云、昨夜更因外宿、即取公用人拳書以帰、前中両生来、高橋生亦来、為借洋書、謙之出館、借外史四冊

晦日、晴

(明治三年六月)

六月分

朔、晴、無事、午後、火深川十二丁、拉僕観因上刺箱崎邸、至夜雨、火気未全消

二日、晴雨不定、是日火船発、岩崎生等帰、因付書信及寒貝、一封贈児

三日、晴、無事、是日謙之創讀洋書

四日、雨、斎藤氏折簡云、福羽四位明日必會

五日、大雨、晩衝雨訪福羽少輔、適豊津藩渡辺修斎亦来会、談話移時、被命飲、且飲且談、修斎頗嗜古癖、有大塔宮隠逃奥石巻之話、

徴証分明、尤足称奇

六日、雨、晩冒雨訪徹定上人於増上寺内、謙吉亦會、話移晷、観六朝及唐・我空海・菅公等真蹟経巻、古雅中含婉妍、迴別摺本、又観神代曲玉・管玉等、皆稀世珍之、借新著二冊帰

七日、雨未歇、浴湯後不出

八日、稍霽、朝長岡生見訪、講大学、門生徒未散、忽有一客、携笙来訪、云大野従六位、四辻家寓、蓋余一日帰自駿臺途、聴洞蕭聲清亮、因躊躇、使僕通刺、伊以為知音者、故来訪、因弄賀殿急一曲、且贈譜書一冊去、蓋畸人也、自謂上野之役、人々騒擾失措、余則吹笙不已、明日野服蕭散歩山中戦場、見逮□（判読不能）且処斬、因辨解、漸免難、其事宜奇矣、晩出街、豚児猪佐来、共携歩街上、過鰻店飲、是日土神賽日、夜訪坂井及福留等

九日、微陰、無事、訪長岡生

十日、晴、訪城戸参議於九段、不在、又訪藤希一郎、竟不知所在、空帰

十一日、雨、講孫子

十二

十三

十四、晴、与長岡生訪諸人、多不在、終過長岡氏午睡、浴後又訪渡辺修斎、夜帰

十五、雨、訪松前邸池田鶴衛於三絃江、托豚児洋学事、下国及鈴木等、皆不在

十六、雨、与福健片謙良吉等遊両国橋下、聴咄之舎柳橋、帰途飲一楼、夜帰、是日付書信於官脚

十七、雨、終日不出、書写遣排

十八、朝雨稍霽

十九、雨

二十、与林生話韓事、移晷、快不可言

二十一、晴、同福留生散歩、到両国橋下、聴劇音

二十二、晴、謙之入邸学、晩訪長岡生

二十三、晴、同松岡七助散歩、訪杉本生於慶応塾、晩帰、夜小野生見訪

二十四、暑甚、無事

廿五日、陰、小野生来云、欲訪亜人當宋如何、即乃与生及栗田萬次郎等出門、訪林屋旧幕人某于木挽街、一酌遣暑、微雨、當宋来晤、遂買舟遊墨水、過浅草川升楼一酌、又換舟到白髭祠前、舍舟散歩、堤樹陰中、晩涼可掬、過所謂梅荘、秋芳欲稍着花、適知薄暮、又登舟納涼、逍遥墨水、遊舫如織、雑沓稍可厭、然予等与洋客相對、談玄狐幽、看別天地矣、乃回棹入小江、両岸燈火映波、橋上衣香鬢影、夜猶昼、実錦城歌吹海中也、達木挽街、各帰邸、夜既近半矣

廿六日、晴、無事、是日先妣忌日、公用局官僕傳別帋来云

高知藩公用人

其藩奥宮周次郎、御用有之候間、禮服着用、明後廿七日巳刻、同道出頭可有之之者也

庚午六月廿五日　　神祇官

晩借禮服於土方氏

廿七日、朝出朝、九字、土方理携予到神祇官府待命、十一字牌、拝命権大史、北小路大祐傳命、同僚松岡明義、々々旧幕府士族、典故家也、余嘗昔年蒙命、学所謂有職者、亦奇遇也、四字退朝、是日詣稲荷社

廿八日、朝、晴、暑甚、八字登官、無事、但視同僚所為耳、官衙暑実酷、数濯冷水、以遣熱

六月の土も焦るゝ暑けさに　こたいしさえもつき流るらん

明日夏越祓除、以布告不暇、不見行、少副及大史因謝罪、以上進退表、然禁中有清祓式、僅存愾(ママ)羊云

廿九日、晴、登官、無事、点検書籍、々々大史所関云、官籍幸雖不多、炎熱拭汗、殆不堪、遂雇給事童子弁事、晩出街買物、是日夏越、予不往、以前日既拝白鬚社也

不参届按文　竪紙ニても横紙ニ而も

私儀

今日登官可仕之處、依所労不参仕候、此段御届申上候、已上

月日　　苗字官名

本官御中

上包　不参御届　苗字官名

（明治三年七月）

文月記

朔旦、晴、朝晏起、福留生見訪、諸生来、講孫子、森本生見訪、托事漾生贈火酒、是日神祇官参拝、余以微恙辞、故不外出、未後与福留氏浴湯、帰訪谷森部旅寓於鍛橋外、微醺、是日渡辺習斎父子来訪、福留生云、予邸藩官如故

二日、陰、登官、無事、宣教博士二人講演、沿例与聴、題云人須習神所為、又云人心有所感而動、福羽美静問官規則及人材登庸等之意見、且云学与教稍有別、学者不必教、々者不必有学、今世或使人為学者、故教不被行、其説稍有理、晩雨蕭々、被酒早寝、夜雨不歇、夜半点燈讀書、涼氣可人

三日、雨、涼氣如深秋、早出官、令僕借蓑笠等、漸辨事、晩退衙、買物若干、是日月金二十圓、漾生齋来、以是稍医近日之渇、夜豚児等来、点瓦燈為戯

四日、陰、雨、冷氣如昨、出官、無事、拝稟月給拾九圓三分壱朱、云以称心得故賜半月三分之二、然則一月給不満四十圓金歟、呵々、晩出街買物、訪松岡欲訥、微醺、早寝、夜瀉下一行

五日、稍晴、力痾出官、無事、晩出街買物書籍、曰諸史品節合本八冊、又買物袴一、夜為小野生等講荘子首篇、是日午後、河蒸気船破裂、爛死二十人、其余傷者七十人、其内外国人五人云、フルベッキ弟及児亦死矣、可駭可憐

六日、半陰、休暇、余瀉利、晩出街散歩、訪細川及丸山等、皆不遇、終繞浅草上野還、無事、今日邂逅薩藩渕辺群平於林有三官舎論事、夜無事、上厠数行

七日、微雨、朝福留及松岡等見訪、欲訥失刀、因達其事於官、諸生数輩来話、終日不出、晩浴後訪小野修一郎於新若丁、不在

八日、新霽、余夜来瀉下二三行、覚微熱、因告官養恙、是日亦書生来話、宮崎生齋示民部省疏、即使僕写、托家信於片岡健吉、云明日帰国

九日、無事

十日、無事

十一日、無事

十二日、朝晴、秋気可掬、出官、同僚松岡云、当病届ハ毎日ナリ、取繕置シト、近来当病ハ毎日届、久病ハ其旨兼テ届置由也、晩伯公御書付拝承、本官規則等定マル、執法掛リ荻原酒田并少史某々等蒙

ル、被仰清書ハ予及同僚等也

十三日、微陰、出官、無事、昨日伯様御書付之御受、一職一人申上ル、晩退食殆三次後、夜無事、訪小野脩一於南街、命飲

十四日、雨、朝稍霽、訪城戸参議於九段坂、暫話、辞去、訪長岡生、不在、生寓臨城隍、蓮花盛開、幽趣可愛、直辞去、途遇雨、夜歩街、得荷香馥郁雨纎々句、懶足轉向

十五日、雨、朝書生二三輩来、名東才右来訪、云客月念六発郷、火船達品海、投宿宿屋街小澤茶店云、豚児等亦来、是日雇老婢給膳、食事銀座三丁尾張屋某、縁家者早亡夫、貧窮極矣、給月二歩、一切不識之約、是日官脚至自郷収家書及朋友書信、六月念六發郷、一家皆無事、禮弟書最詳悉、予傷暑下利三四行、腹亦微痛、夜無事

十六日、陰、雨時至、養痾不出、南部生来訪、談話移晷去、与生相別殆八九年所矣、恍如夢境、諸生輩多来話、生田生来診、予云腸胃中事、因附法和葛粉、或蕨為餌、投制酸散去

十七日、告疾於官、臥官舎、無事、雨稍霽、然騒雨時至、不能定

十八日、雨晴終日不定、名東生来云、明日帰郷、因付書信二種、寄弟及荊婦鶴児、杉本生来訪、暫話、予是日下利歇、腹部稍快、夜医来診、云稍愈、贈名東生歌筆即吟

客衣はる〳〵来鶴かひもなく　けふきぬ〳〵と聞くか悲しさ
わすれすは思ひもいてよ吾妻路の　小澤の沼の秋のけしきを
一従各國給交親、佛利英蘭闘日新、却怕春風数年後、死盃亦是斗筲人

右、中原恭介姉某女史作

勝麟太郎歌

遠しとて思ひやみなはいつの日に　國の御威稜をよそにしらさむ

右二首随聞即録

十九日、雨、無事、養痾在蓐

廿日、稍霽、出官、無事

廿一日、晴、暑、午後訪中村光枝于麻布安名町、返書紀集説及大網弁記傳大祓正義等数種、又借集説及裏書等数種来、帰途訪同僚松岡重三郎明義於森本街、暫話辞去、暑甚、浴後飲鰻店、夜無事

廿二日、出官、無事、晩帰納月金七十餘両七月八月分

廿三日、又病下利、告官養痾、是日官有廃帝大友及九條廃帝奉諡号祭典、諸官皆来拝云

廿四日、猶病、不出官、在蓐、看書遣悶、小野生来話、普魯生与仏蘭西戦状、伊斯把遂其女王某王遁於孛魯、孛納之、使其小侯某假王伊國、伊人不服、各立党、一欲共和政治、一欲立君政治、而仏王聞之、昱其共和、逐假王、於是孛怒与仏絶交

廿五日、晴、出官、無事、晩退食後、歩市街、夜与福留生聴話

廿六日、晴、暑、穂積耕雲来訪、暫話、遂共相携訪藤川三渓于数奇寄屋街上、主人頗磊落、嘗著戦史二十巻、記奥羽及北越蝦夷戦争、又好吟哦、命飲、且飲且話、賀川生来晤、三人相共買船、遊于両國橋下、川風吹醉顔、秋涼可掬、興趣尤多、観烟花、戯舸舟於柳橋下又飲、遊舫如織、楼々点火如蛍日、其盛可想、多是徴士遊傲所在

思ふとそ隅田川辺の夕涼　舟はなかれに任せてそ行

廿七日、早起、出官、炎威如酷吏、殆不堪呻吟、簿書中耳、二字後、岡堀二生講義、輔相公及参議某々臨席、晩退衙、夜歩微飲

廿八日、晴、暑如昨、早起、作家書、出官、無事、晩僕不来、獨退衙、途中僕来云、午睡過時、謝罪、夜散歩坊間納涼、是日官脚発付家書数通

廿九日、晴、出官、無事、暑陪昨、小笠原楠弥太来自西京、云盆後発京師、有志修学、晩退衙、夜出街訪大隈氏、不在、乃訪大村辰也、暫話、渠頗好議論、可喜、借燈隣、喫鶏肉

晦日、晴、早起、出官、同僚松岡生以事故不朝、与間宮大史校検官中蔵籍、晩退食、吉永生某等来訪、命飲、且飲且談、適豚児亦来、尽歓去、夜福留生亦来晤、終日来賓応接殆憊、被酔早寝

参考一、「方今王政維新云々」（明治三年二月）

方今

王政維新ノ運ニ膺ラセラレ。弘ク万國交際ヲ御開ラキ。諸制度衆議ノ上。悉皆善美ヲ盡サセラレ。洋外ノ伎倆器械迚モ。利アルハ折中シ。時勢適当ノ大変革ヲ行ハセラレ。首トシテ職員官吏ヲ選撰シ。神祇官ノ次ニ。新タニ宣教使ト云局ヲ設ケ。専ラ文明開化ニ導カセ玉フハ。実ニ千載ノ一遇難有　聖世ト可奉称ナリ。其宣教ノ主意未タ詳カニ承マハラスト雖モ。蓋　皇朝固有ノ神道本教ヲ掲ケ。或ハ之ヲ翼クルニ儒教ヲ以シ。兼子テ洋教ノ濫入ヲ防禦シ普ク海内ノ民ヲシテ。洋教傳染ノ患ナカラシメントノ事ナルヘシ。（仄ニ承ルニ去冬既ニ東京ニ於テ始メテ宣教ノ講義を開キ。説得セリト）今般吾カ藩ニ於テモ。此　朝旨ヲ奉躰。新タニ諭俗司ト云一局ヲ設ケ。民間教諭ノ事ヲ司ラシメ。弊風ヲ正シ教化ヲ國中ニ宣布セシメ。且又洋教濫入ノ豫防ニ備ヘシメントス。抑洋教ノ我カ皇國ニ東漸セシ起原ハ元亀天正ノ際天下大乱。　王綱解紐ノ虚ニ乗シ。波伊（ホルトカルイスパニア）二州ノ夷酋ヨリ　皇國ヲ奪領セント謀リ。先ツ人心ヲ収攬セン為メ所謂耶蘇教師ヲ差遣シ。雑ユルニ幻術医方等ヲ以シ。且

財利ヲ以テ貧賤愚俗ヲ煽動誘惑ス。嘗聞彼ニ酋蓋志ヲ逞クセント欲シ國人三分ノ一ヲ欠テ我カ貧民ヲ救恤シ人毎ニ銀八厘充ヲ恵ミ彼宗ニ引入セント云ヘリ 時ノ幕府織田右府。好奇ノ餘リ其教師ヲ京都ニ招致シ。寺ヲ建テ恣マヽニ弘法セシム。於是我人心彼ニ奪ハレ。干戈ヲ用ヒズシテ殆ント彼ノ属國トナラントス。右府始テ其奸謀ニ驚キ。速カニ寺ヲ毀チ其宗旨ヲ禁制ス。然レトモ其残毒海内ニ蔓延シ。竊カニ國家ノ害ヲ為セシヲ。太閤亦之ヲ怒リ。厳法峻刑ヲ以其根株ヲ禁絶セリ。爾後西肥天草ノ姦賊其よ陣を煽キ。愚俗ヲ嘯集セシヲ。遂ニ二十八万人ノ夥シキヲ一城中ニ屠尽シ。永ク國家ノ大禁トナリ。今ニ三百年此ノ妖氛ヲ掃蕩セシハ。実ニ 皇祖在天ノ英霊威風ト云ヘシ。洋夷コレヨリ已後日本人三眼アリトテ大ニ畏レシト云。今ソレ皇運中興ノ時ニ當テ。大ニ外國交際互市ノ道ヲ開キ。 皇風ヲ海外ニ敷廣セシメント為玉フ折柄ナレハ。彼万國狡黠ノ夷中ニハ。万一我ガ虚ヲ覬覦セント謀ルモノ無キヲ保セス。若或ハ然ラハ。火技戦艦ノ奇巧。既ニ如彼頗ル人ヲシテ恐怖ヲ懐カシム。況ンヤ洋教ノ善巧専ラ利慾ヲ以テ之ヲ誘惑セシムルヲヤ。西肥邉土ニハ。往々其傳染毒ヲ被リシモノアリテ 朝裁コレヲ各國ニ散布禁錮セシメ。外人啗利ノ奸謀ヲ絶チ。漸々教化ヲ盛ニシテ其徒ヲ説得シ。良民本業ニ復ラシメントス。昔ハ厳刑峻法ヲ以テ之ヲ禁絶シ。今ハ寛大至仁ヲ以テ之ヲ教喩セントス。嗟乎真ニ文明開化ノ 聖世ト称スヘキ哉。臣某不肖膚浅ノ学識ヲ以テ叨リニ乏ヲ諭俗ノ職ニ承ケ。夙夜職事ニ黽勉シ。 朝廷風教ノ万一ヲ裨補セント欲シ。其概略ヲ述ル事爾リト云

時ニ明治三年庚午春二月念五

高智藩廳諭俗司都教兼副家扶

侍讀第五等官　臣奥宮正由謹識

参考二、「喩俗大意」（年月日未詳）

喩俗大意

此度　朝廷御一新首として宣教使と申官員を新ニ建させられ、普く教化を海内ニ敷キ施させらるゝ　朝旨を奉体、於當藩も喩俗之官を被立置、民間教化取調らへ被仰付、則今日拙者共回勤いたす事ニ候、右教喩規則ハ別紙ニ具する如く候へとも、猶又新局御設之主意、篤と相心得候為メ、郷長村老惣組頭共集會為致、各江直ニ面會し、其土地人物民情等を察し、口授面命いたす事ニ候、抑民間ニ教を立ると申事、此度始而之事ニ而、是迄絶而無之、偶々年ニ一度、宗門改之節、御法令為讀聞之式有之、或ハ僧家之法談を聞候歟位之事にて、惣て立教之規則と申程之もの無之、且四民の内にても農家ほと忙かわしき者なし、其中ニて粗々人倫の大意を知らしめ、聊か礼儀の端を辨めへしめむとするハ、最モ難き事ニ候、然れとも人間と生れし難有さハ貴賤知愚の差別なく、天性本心なきものなし、然れハ今其本心を呼出たさしむる易蘭の教法を設け、其人を得て懇切ニ解喩の道を尽し候へハ、農家忽忙の者といへとも、其分相應ニ少しハ益あるへきか

御一新以来ハ御高札も改まり、彼三章之御大法を初メ、夫々時勢適當之條件を掲けられ、且今般當藩大改革之御制度、是又政廳戸籍係り等より時々御布告も有之候へとも、愚痴蒙昧之下民ハ何事とも

辨まへ兼、徒らニ儀式一通り之様相流候弊も有之、切角懇到至仁之御主意、下々江不貫徹のミならす、下情亦上ニ不通達、如斯行違候より、或ハ疑惑を生し、安民之政、翻而苦民之基ト相成候而は、実ニ不安恐入候次第ニ候、依之別ニ當役場を被立置、此間を幾重も調停保護せしむる事ニ候

扨喩俗と申候へハ、何か六かしき様聞へ候へとも、何も別段の事ニ非らす、やはり此迨郷長村老等ハ、其配下之民庶を宰シテ法令を為守、風俗を正し、家内睦敷、隣家合壁相助ケ、公事訴訟を不好、各々家業勧進為致、今日父母妻子を無事安穏ニ為過候事、其職掌ニ而、名こそ替れ、即諭俗官ニ候間、追々役下共回勤為致、解喩いたし候節ハ相互ニ協心合力、憤發勉強し、方今文明開花之萬一を補ハんと庶幾いたさずてハ不相成訳ニ候、乍併教喩と申ものハ勿論一篇之布告、文字の上ニ而ハ不能尽、其處々の風土人情ニ不適而は被相行間敷ニ付、郷長村老ハ不及申、其餘浪人医師又ハ神職出家修験等ニ至迨、喩俗之任ニ堪へたる見込之者有之候ハ、可申出、且教喩之儀ニ付存意有之面々ハ、無伏蔵書取を以可申出候、於委曲之儀ハ訳下よりも演舌ニ可及候へとも、右之主意兼而相心得候様、屹度申渡候、以上